

# マーティノーとギヤスケル

## — 『マンチェスター・ストライキ』と『メアリ・バートン』 —

松本三枝子

### 1 “new science”としての“political economy”

ハリエット・マーティノー(1802-76)とエリザベス・ギヤスケル(1810-65)はヴィクトリア朝の社会問題を積極的に扱った作家であったが、その問題提起や解決方法等は対照的と考えられてきた。<sup>1</sup> 本論で取り上げる『メアリ・バートン』(1848)の序で、ギヤスケル自身が極めて興味深い意見を述べている。“I know nothing of Political Economy, or the theories of trade. I have tried to write truthfully; and if my accounts agree or clash with any system, the agreement or disagreement is unintentional” (*Mary Barton* 4).<sup>2</sup>

ギヤスケルのこの発言は、同時代の経済学(Political Economy)や自由放任主義について、自らの無知や無関心を暴露しているようでもあるが、むしろ処女作の序における作家としての決意表明とも読める。Jenny Uglowは、ギヤスケルがマーティノーや経済学者達と敢えて距離を置き、真実が理論よりも重要であると主張していることに、彼女の謙虚さと大胆さを見出している(Uglow 192)。つまり、産業都市マンチェスターにおける社会問題を扱うにあたり、経済学や自由放任主義をどのように理解するかにより、その問題提起や解決方法に違いが現れるのが当然であった。

加えて、ギヤスケルの夫がユニテリアン派の牧師であったことも彼女の意見表明に大きな影響を与えたと考えられる。なぜならユニテリアン派の信徒の中には、産業ブルジョワジー、銀行家等の資本家が多く、ギヤスケル自身もそのような人々と親交を持っていたからである。それゆえ彼女は、それらの人々の成功を支えた経済学や自由放任主義をあからさまに否定するのではなく、距離を置くことにより、自らの主張を甘受されることを願ったと解釈できる。『メアリ・バートン』は、社会問題を自らの立場から扱ったギヤスケルにとり、作家としての маниフェストであり、同時代社会の趨勢に対する根底的な批判でもあった。

そもそも、ギaskellが距離を置こうとした“Political Economy”とは何を意味するのであろうか。OEDは、“originally the art or practical science of managing the resources of a nation so as to increase its material prosperity”と定義している。アダム・スミス『国富論』(1776)、トマス・マルサス『人口論』(1798)、デイヴィッド・リカード『経済学及び課税の原理』(1817)、ジェイムズ・ミル『経済学綱要』等、主に18世紀の先行研究に基づいており、われわれが「経済学」と呼んでいる学問分野の萌芽であった。この新しい学問への関心は高く、ジェイン・マーセットは、中産階級の女性読者のために、*Conversations on Political Economy in which the Elements of that Science are Familiarly Explained* (1816)と題する解説書を書いている。このような解説書が出版されたことは、「経済学」という新しい学問分野の重要性と影響力を物語っており、このマーセットの解説書は、マーティノーも読んでおり、彼女にも多くの影響力を与えている。<sup>3</sup>

そして興味深いことに、ギaskellの父親である William Stevenson も「経済学」に関心を持った人物であった。彼は、1824年から1825年にかけて“The Political Economist”と題するエッセイを『ブラックウッズ誌』に掲載している。彼は「経済学」が有益であることを認めながらも、十分な事実に基づいていないために未完成な学問であると指摘している。経済学の重要性を認めながらも、「事実を都合の良い観点からのみ解釈する」<sup>4</sup> ために、理論としては未完成であるとしている。

ギaskellは父のエッセイが出版された時にはまだ14歳であり、父が再婚後は不仲になり、これを読んでいるか否かは明らかではないが、ジョゼフィン・ガイは、次のように『メアリ・バートン』における事実への執着と、経済学の理論から乖離した労働者の貧困の現実を描写することに、その影響を見出している。

As her father recommended, Gaskell seems concerned to look at precisely those ‘consequences’ and ‘circumstances’ ignored by the experts; she focuses, that is, on the consequences of economic doctrines for ‘the interest of the community at large’, where community includes workers, employers and consumers. Furthermore, Gaskell constantly tests the ‘truth’ of her evidence – of the ‘facts’ she enumerates – against a knowledge of human nature. So a central theme of the novel is to show that reactions to extreme poverty, even violent ones, are in some sense ‘natural’. (Guy 148)

飢餓の40年代に書かれた社会小説は多くあるが、その中で『メアリ・バートン』に描かれる労働者の貧困は、極めて具体的で、詳細な事実に基づいたものである。『オリヴァー・ツイスト』(1839)や『シビル:二つの国民』(1845)等と比較する時、ギヤスケルの『メアリ・バートン』が、彼女のマンチェスターでの生活に根差した情報収集により書かれたものであることがよくわかる。貧困は一般化や抽象化されることなく、あくまで事実を詳細に語るにより伝えられる。

例えば『メアリ・バートン』の第2章「マンチェスターのティーパーティ」では、卵、ミルク、パン、ラム酒等の食糧の値段が述べられ、第4章「老アリスの身の上話」ではアリスが、メアリとマーガレットのために用意するお茶やバターを購入するために、彼女の半日分の稼ぎが消えるという事実等が描かれている。さらに第3章「ジョン・バートンの苦悩」では、メアリがお針子として店と結ぶ契約について詳細に語られる(MB 27)。

ほとんど無報酬というべき厳しい経済状況で、若いお針子達は、華やかな衣装に囲まれながら、自らは生活に困り身を落とすことも多いのが実情であった。メアリや叔母のエスタのように美しい労働者階級の娘は、夢のような富裕層の世界に憧れ、厳しい日常生活から逃れるために、誘惑も多かったことが理解できる。食糧の値段や、契約の実態等、ガイが指摘するように「労働者階級の貧困の事実」(Guy 148)がいかに当時の経済学、自由放任主義経済から看過されていたかを、ギヤスケルは執拗に描いていこうとする。このように労働者階級の貧困問題を、中産階級の読者に伝えることにより、この社会問題の共有を提起したのが、ギヤスケルであるならば、マーティノーは、労働者が貧困問題を構造的に理解することにより、労使でこの問題を共有し解決しようとした。

## 2 功利主義小説と社会小説

作家としてのマーティノーの成功は、ほとんどこのシリーズ、*Illustrations of Political Economy* (1832-34)によるものである。月刊で25巻からなるこのシリーズは、出版社を探すことに最初は苦勞したものの、すぐにベストセラーとなり、その名声はアメリカにまで伝わった(*Autobiography* I, 160-81)。マーティノー自身はこのようなシリーズの需要に確信があったことが、彼女自身が書いたこのシリーズの序からもわかる。

There are a few, a very few, which teach the science systematically as far as it is yet understood. These too are very valuable: but they do not give us what we want — the science in a familiar, practical form. They give us its history; they give us its philosophy; but we want its picture. (*Illustrations of Political Economy* I, xi, emphasis added)<sup>5</sup>

この序からもわかるように、マーティノーは「経済学」に多くの期待を寄せている。この学問の普及が、同時代のイギリスの社会問題を解決へと導く有効な方途となると彼女は考えている。<sup>6</sup> そのために彼女が選択したのが、物語により経済学の理論を解説するという方法であった。前述したように、彼女にはジェイン・マーセットという先達がいた。しかし、マーセットの解説が女教師と女生徒の対話形式によるのとは異なり、マーティノーはさらに発展して物語による解説書とした。加えて彼女は、ヴァレリ・サンダーズが指摘するように、このシリーズで極めて網羅的に同時代の社会問題を扱っている。

Unemployment, the poor, true and false religion, the meaning of love and its importance, the role of women in a changing society, parent-child relationships, education, trade unions, emigration, taxation, socialism, the French Revolution, Irish disaffection, the bank crashes, the replacement of men by machinery in certain industries; all these are topics covered by her *Illustrations* alone . . . (Sanders 195)

サンダーズのようにマーティノーの『経済学例解』が果たした歴史的意味と先見性を評価する研究者がいる一方で、ルイ・カザミアンのように、これらの物語を、『メアリ・バートン』に代表されるような社会小説とは異質であるとする意見もある。カザミアンは、その著『イギリスの社会小説』の第2章「功利主義小説」で、マーティノーの『経済学例解』を議論している。彼女の物語の文学性は小説と呼ぶ領域には達していないとして、“the utilitarian novel”と位置づけている (Cazamian 37)。ディケンズの社会小説は、イギリスの芸術一般が共有する教訓性、道徳性が色濃いと指摘し、『メアリ・バートン』もその系譜で論じられる。つまり、合理主義と文学の融合である功利主義小説と、道徳性や教訓性が強い社

会小説とは異なる小説群ということになる。このようなカザミアンの評価は、『経済学例解』の文学性に対するその後の評価に影響を与えることになった。

例えば、キャサリン・ギャラガーの次のような指摘は、カザミアンの議論の延長線上にあるものである。

... important differences in their fiction can be traced to their disparate attitudes toward causality and free will. Martineau believed that Providence worked through natural laws that precluded human free will, whereas Gaskell, without abandoning the idea of Providence, tried to make room in her fiction for moral freedom. Gaskell's use of causality, like that of many other thoughtful Unitarians of 1840s, was less consistent than Martineau's. It was, however, her very inconsistency, her refusal to be tied down to a single explanatory mode, that marked Elizabeth Gaskell's advance over Harriet Martineau in the craft of novel writing. (Gallagher 65)

ギャラガーは、小説の中での因果律の在り方を、マーティノーとギヤスケルで比較することにより、彼女らの小説の文学性の違いを指摘している。共にユニテリアンであった二人の作家における、神の存在と人間の自由意志の関係における違いを、摂理や理念に従属するマーティノーと、柔軟に運用することで人間性を見出し、そこに物語性や文学性を見出すギヤスケルとの違いが強調されている。

総論としてのギャラガーの批評には説得力が感じられるのであるが、同じマンチェスターの貧困問題を扱ったマーティノーの『経済学例解』シリーズの『マンチェスター・ストライキ』と、ギヤスケルの『メアリ・バートン』とを比較することで、この二人の作品世界はそれほど異なるものなのかを検証したい。<sup>7</sup>

### 3 『マンチェスター・ストライキ』と『メアリ・バートン』の共通性

『マンチェスター・ストライキ』については物語の粗筋を予め述べておく必要があるだろう。主人公であるウィリアム・アレンはマンチェスターの工場労働者であった。穏健で信頼できる人柄のために仲間の信望もあつく、組合執行部として経営者側と交渉する立場となる。労働組合はアレン自身の判断とは異なり、賃金の上昇を求めてストライキを断行するが、不景気と労働力の過剰から、労使交

事は失敗に終わる。経営者側から、組合執行部の再雇用は拒否されたため、アレンは失業し家族を養うためにやむを得ず街路の掃除夫に身を落とすことになる。

『マンチェスター・ストライキ』の巻末に付された「この巻における経済学のみとめ」では、“Commodities, being produced by capital and labour, are the joint property of the capitalist and labourer” (MS 134) と書かれ、工場で生産されたものを経営者と労働者の共有の産物であると指摘している。加えて下記のように労働者の状況を改善するための具体的な提案を書いている。

The condition of labourers may be best improved,—

1<sup>st</sup>. By inventions and discoveries which create capital.

2<sup>d</sup>. by husbanding instead of wasting capital:—for instance by making savings instead of supporting strikes.

3<sup>d</sup>. By ADJUSTING THE PROPORTION OF POPULATION TO CAPITAL. (MS 136)

ここでは「資本に見合った労働人口の調整」が強調されているが、「資本を創り出す発明や発見」、「貯蓄をすることによる資本の管理」を勧めていることを記憶にとどめておきたい。このように予め『マンチェスター・ストライキ』について、物語の内容とマーティノーが付けた「経済学」のみとめを把握した上で、『メアリ・バートン』との比較に移りたい。

#### 1) ウィリアム・アレンとジョン・バートン

『メアリ・バートン』においてメアリの父親であるジョンが元来は主人公であったことはよく知られたことである (Letters 70)。マンチェスターの工場労働者であったジョンは、自分の家族はもちろんだが仲間やその家族まで思い遣る人間性に溢れた人物として造形されている。『マンチェスター・ストライキ』のアレンと同様に、ジョンも最初から急進主義者ではない、むしろ穏健な人物である。

アレンは仲間に背中を押されるようにして組合の執行部となり、賃上げ交渉の矢面に立っていく。彼はストライキに必ずしも賛成していないが、組合としてはストを強行する決断をすることになる。一方、ジョン・バートンが殺人を犯すことになる顛末は、物語の重要な伏線でもあるが、労働者の訴えに耳を傾けようとしない支配階級への怒りが根底にある。ジョンはチャーチストとしてロンドンへ

向かうが、彼らの訴えは完全に無視されることになる。彼の支配階級への怒りが理不尽なものではないことが次のような描写からもわかる。

Hungry himself, almost to an animal pitch of ravenousness, but with the bodily pain swallowed up in anxiety for his little sinking lad, he stood at one of the shop windows where all edible luxuries are displayed; haunches of venison, Stilton cheeses, moulds of jelly—all appetising sights to the common passer-by. And out of this shop came Mrs Hunter! She crossed to her carriage, followed by the shopman loaded with purchases for a party. The door was quickly slammed to, and she drove away; and Barton returned home with a bitter spirit of wrath in his heart, to see his only boy corpse! (MB 25)

生死を分けるほどの貧富の差が、労働者と経営者との間にあり、豊かな者は貧しい者の窮状に全く無知であり、関心を払おうともしない。ジョン・バートンの怒りが抑制できないものとなっていく理由は、貧しさゆえに息子を亡くし、その心痛から妻をも亡くすという彼自身の悲痛な経験にあった。彼の怒りは当然のものであり、人間的でさえある。

つまり、ウィリアム・アレンもジョン・バートンも理解不能な怪物としては描かれていない。アレンがストライキを断行せざるを得なくなり、ジョンが殺人を犯してしまうほどに追い詰められていくのはなぜなのか、そこに二つの物語の焦点が存在している。それゆえに彼らの怒りと困窮は極めて具体的に描かれている。

## 2) 労働者と経営者とは共通の利益で結ばれている

『マンチェスター・ストライキ』におけるウィリアム・アレン対ウェントワース氏、『メアリ・バートン』におけるジョン・バートン対カースン氏、つまり労働者対経営者という二項対立はそれぞれの物語の根底にはあるが、むしろその対立を解消するような考え方が一貫して唱えられている。最初の例は、『マンチェスター・ストライキ』において労働者たちが、ストライキについて議論している場面からである。

“... the masters unite to refuse us work till we give up our stand against Mortimer

and Rowe, what are we to do then?"

"To measure our strength against theirs, to be sure. You know they can't do without us."

"Nor we without them; and where both parties are so necessary to each other . . . ."  
(MS 10)

労働者と経営者とを対立的に捉えようとする意見に対して、双方が互いを必要としているという意見が労働者同士の議論の中で、提示されている。

同様の考えは『メアリ・バートン』の序でも述べられている。<sup>8</sup>

The more I reflected on this unhappy state of things between those so bound to each other by common interests, as the employers and the employed must ever be, the more anxious I became to give some utterance to the agony which . . . convulses this dumb people; the agony of suffering without the sympathy of the happy, or of erroneously believing that such is the case. (MB 3, emphasis added)

つまり、労使の対立は相互の無理解や誤解が生みだしたと考え、労働者と経営者の間に存在する深い亀裂に橋を架けるために、これら二つの物語は語られている。労働者と経営者を二極化し、二項対立的に捉えようとする考え方を見直し変えようとするものである。

3) ストライキあるいは組合への否定的な考え方

『マンチェスター・ストライキ』において、経営者側の代表として登場するウェントワース氏は、労働者側からも分別のある人物として尊敬されている。その彼が次のようにストライキの無意味さを力説している。

" . . . I [Mr. Wentworth] doubt whether a strike is one of the means which will gain your point. It will leave your case worse than in the beginning, depend upon it. A strike works the wrong way for your interest. It does not decrease your numbers, and it does decrease the capital which is to maintain you." (MS 60)

経営者であるウェントワース氏から見れば、賃金は労働力と資本のバランスで決まることになる。不況の中では、経営者でさえも決して安泰ではない。ノリッジの産業ブルジョワジーの娘であったハリエット・マーティノーは、父が事業に失敗したことから自活し、ガヴァネスになろうとするが耳が不自由なためにならずに物書きとなった ( Webb 43-64 )。ストライキに対する否定的なウェントワース氏の見解の背後には、そのような体験を持つマーティノーの資本を重視する経済学があると考えられる。それゆえ、この物語ではストライキも組合も否定的な側面から描かれている。

それでは『メアリ・バートン』では、これらのものはどのように描かれているのだろうか。最も記憶に残るのは、ジョウブ・リーの次のような言葉である。

“I [Job Legh] would take what I could get; I think half a loaf is better than no bread. I would work for low wages rather than sit idle and starve. But, comes the ‘Trades’ Union, and says, ‘Well, if you take the half-loaf, we’ll worry you out of your life. Will you be clemmed, or will you be worried?’ Now clemming is a quiet death, and worrying isn’t, so I choose clemming, and come into th’ Union. But I wish they’d leave me free, if I am a fool.” (MB 197)

組合のオルグ活動へのジョウブの批判は率直で根底的なものである。しかし、労働者として組合に加入せずには働けない状況であったことが、彼の言葉から理解できる。それではこのような組合批判をしているジョウブとはどのような人物なのであろうか。彼はマンチェスターの工場労働者の中でも、博物学に深い関心を寄せる人物で、労働者でありながら、中産階級の価値観を共有できる人物として描かれている。彼はギャスケルがこの物語の中で最も信頼を置いた人物であり、中産階級の読者にとっても共感を抱くことができる人物として描かれている。少し滑稽でありながらも、分別があり人間的で暖かみがあるジョウブと彼の孫娘のマーガレットの一家には、貧困や障害（マーガレットの失明）を乗り越えることができる展望がある。彼の分別と理性は、彼の家族のためだけではなく、この物語の中枢に位置づけられるジョン・バートンとカースン氏の対立の解消にも有効な役割を果たすことになる。

貧困ゆえに息子を失ったバートンと、労働者の貧困を救済しようとしぬい経営者に憤り、チャーチストになったバートンに息子を殺されたカーソン氏は、相互に憎み合う間柄である。しかし同時に彼らは共に愛する息子を亡くした父親であった。ヘンリ・カーソンの殺害を告白するジョン・バートンは、自らの罪を次のように述べている。

“I did not know what I was doing, Job Legh; God knows I didn’t. Oh, sir!” said he wildly, almost throwing himself at Mr Carson’s feet, “say you forgive me the anguish I now see I have caused you. I care not for pain, or death, you know I don’t; but oh, man! forgive me the trespass I have done!”

“Forgive us our trespasses as we forgive them that trespass against us,” said Job, solemnly and low as if in prayer: as if the words were suggested by those John Barton had used. (MB 367, emphasis added)

ジョウブはジョン・バートンの罪の告白を悔悛の言葉として、聖書の言葉に繋ぐ役目を果たしている。ジョウブの言葉は、ルカやマタイの福音書の言葉を連想させるものであり、許しの心の在り方を説いたものである。

このようなジョウブの橋渡しを経て、カーソンは聖書の言葉に向かいバートンの悔悛を受け入れることができるようになる。このように重要な役割を担わされているジョウブ・リーが語る組合やストライキへの批判の背後には、ギヤスケルの考え方が影響していると考えられる。労働者の貧困問題を解決しようとする時、経営者側の無関心や無知は解消されるべきものであるが、組合のオルグ活動やストライキは、この社会問題を解決する手段として評価されてはいないのである。

つまり前述したウェントワース氏に代表されるような『マンチェスター・ストライキ』における組合やストライキ批判と、『メアリ・バートン』においてジョウブ・リーにより語られる組合批判は、経営者と労働者という立場の違いがありながらも、共通した考え方であると理解できる。

#### 4) 労働者階級の貧困問題の克服

『マンチェスター・ストライキ』において、マーティノーの意見を最も忠実に反映しているのが、経営者のウェントワース氏である。彼が労働者たちに向けて、彼らの現状打開策を極めて具体的に語る次の場面は、マーティノーによるこの社

会問題解決策をそのまま語っているかのようである。

“You must watch every opportunity of making some little provision against the fluctuations of our trade, contributing your money rather for your mutual relief in hard times, than for the support of strikes. You must place your children out to different occupations, choosing those which are least likely to be overstocked; and, above all, you must discourage in them the imprudent, early marriages to which are mainly owing in distresses which afflict yourselves and those which will for some time, I fear, oppress your children.” (MS 102-03, emphasis added)

ここで提案されている労働者の貧困問題に対する解決策は、i) 貯蓄の勧め、ii) 親子は異なる職業に就くこと、iii) 晩婚の勧めである。貧困問題の解決が、一方的に労働者側に委ねられており、あたかもこの社会問題の原因が労働者側にあるかのようである。<sup>9</sup> そのような経営者に都合の良い見解であることを指摘したうえで、しかしウェントワース氏の意見は極めて具体的で有効であると言わねばならないだろう。貧困問題が社会問題である以上、やはり労働者の側にもこの問題解決のために、現状打開策を必要とするということである。

例えば、ジョン・パートンが息子を病気で亡くすることになる契機は、彼の失業に起因した貧困である。しかし、それは突然の天災ではなく、彼が用心深ければ回避することができたのではないか。失業は避けることができなくとも、彼に蓄えがあったならば、状況は異なっていたのではないだろうか。彼には、貯蓄する余裕が全くなかったとは言えないのである (MB 24)。

マーティノーほどに直截的ではないが、ギヤスケルも労働者が失業を契機に転落していく場合に、貯蓄の有無が重要であることを十分に描いている。ジョウブ・リーとマーガレットの家族が、パートン家と比べて、安定した家庭として描かれているのは、前者に貯蓄があるからである。ジョウブは、貧しいながらも、彼の趣味のために蓄えを持ち、失明したマーガレットにも歌手としての収入から古いティーポットにわずかながらも蓄えていることが書かれている (MB 262)。

前述した『マンチェスター・ストライキ』の巻末に書かれたまとめには、労働者への現状を改善する解決策に、発明や発見による資本を創り出すという自助努

力がある。まさにこの事例と言えるのが、『メアリ・バートン』のジェム・ウィルソンである。彼はメアリの父が犯した殺人罪の濡れ衣を着せられる人物であるが、工場労働者でありながら、機械の改良を工夫すること（クランクの発明）で認められ昇進する。殺人の濡れ衣を着せられるが、無罪となりトロントへイギリス政府から教員として派遣されることになる。ジェムは自らの発明により、機械工から教員へと立身出世した人物である。

以上4点を論じてきたが、『マンチェスター・ストライキ』と『メアリ・バートン』には、想定されている以上に共通する思想や考え方が多いことが理解できる。確かに、マーティノーは、社会問題を経営者の側から、中産階級の価値観から見ていこうとしているが、ギヤスケルにもその傾向は否定できないのである。ギヤスケルが経済学の理論では無視されがちな労働者が直面している貧困の事実を粘り強く描いているとすれば、マーティノーの労働者への提案は、極めて具体的で、わかり易いものである。

ルイ・カザミアンのように「功利主義小説」と「社会小説」とに、『マンチェスター・ストライキ』と『メアリ・バートン』を区別してその違いを強調するよりも、同時代に生きたユニテリアン派の女性作家が、労働者が抱えた貧困問題を、彼女たちのペンにより解決しようと果敢に取り組んだことが重要ではないだろうか。そしてこれらの小説は共に二人の女性作家を、世に送り出しその名声を確立する業績となったのである。19世紀のイギリス社会において、男女の性別役割分業が確立されていく中で、若い女性が労働者の貧困問題を解決しようと、物語ることにその影響力を見出したことに、ハリエット・マーティノーとエリザベス・ギヤスケルの共通性が見出せるということができる。

\*\*\*\*\*

## 注

本論は第22回日本ギヤスケル協会全国大会（2010年10月3日 於実践女子大学）におけるシンポジウム「エリザベス・ギヤスケルと同時代の女性作家たち」での研究発表に基づいており、平成23年度愛知県立大学学長特別教員研究費に依る研究成果の一部である。

- 1 本論ではルイ・カザミアン、キャサリン・ギャラガー、ヴァレリ・サンダーズの議論を主に取り上げる。マーティノーに関する優れた研究書 *Reason Over Passion* もあるサンダーズの“Harriet Martineau and Elizabeth Gaskell”は二人を対等に扱っており、マーティノーの先駆性を強調している数少ない論文である。  
(*Gaskell Society Journal* 16)
- 2 『メアリ・バートン』の引用は、ペンギン版 *Mary Barton: A Tale of Manchester Life* に依る。以後は本文中に *MB* と略記し頁数と共に記す。日本語訳は直野裕子訳『メアリ・バートン』を参考にさせて頂いた。
- 3 マーティノーが『デイリー・ニューズ紙』に書いたマーセットの略伝は、マーセットを先達として高く評価している (“Mrs. Marcet”)。また二人の比較については、吉野成美「似て非なるアダム・スミスの娘たち」が参考になる。
- 4 William Stevenson, “The Political Economist” *Blackwoods Magazine* XVII (1825): 208.
- 5 『経済学例解』の引用は、*Illustrations of Political Economy*. London: Charles Fox, に依る。以後は本文中に、巻数と頁数を記す。ただし *A Manchester Strike* は *MS* と略記し頁数と共に記す。
- 6 マーティノーは社会的弱者である女性や労働者に対する教育の必要を生涯一貫して説いている。『経済学例解』はそのような彼女の立場を物語るシリーズであるが、弱者がその補助的立場を受け入れるために教育を必要としていると指摘する研究者もいる。(David 53)
- 7 マンチェスターにおける貧困問題がいかにこの時代の耳目を集める象徴的な社会問題であったかについては、松村昌家「貧富——マンチェスターの<二つの国民>」に詳しい。
- 8 『メアリ・バートン』の本文でも同様の考え方が示されている。“Distrust each other as they may, the employers and the employed must rise or fall together” (171).
- 9 マーティノーのこのような考え方を、Deirdre David は体制を補強する役割を果たしたと分析している。(David 27-93)

## 引用文献

- Cazamian, Louis. *The Social Novel in England 1830-1850*. Trans. Martin Fido. London: Routledge & Kegan Paul, 1973.
- David, Deirdre. *Intellectual Women and Victorian Patriarchy*. London: Macmillan, 1987.
- Gallagher, Catherine. *The Industrial Reformation of English Fiction*. Chicago: U of Chicago P, 1985.
- Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton: A Tale of Manchester Life*. Ed. MacDonald Daly. 1848. London: Penguin, 1996.
- . *The Letters of Mrs Gaskell*. Eds. J.A.V. Chapple and Arthur Pollard. Manchester: Mandolin, 1997.
- Guy, Josephine. *The Victorian Social-Problem Novel*. London: Macmillan, 1996.
- Logan, Deborah Anna. Introduction. *Illustrations of Political Economy*. Toronto: Broadview, 2004.
- . *The Hour and the Woman*. Northern Illinois UP, 2002.
- Martineau, Harriet. *Illustrations of Political Economy*. 9 vols. London: Charles Fox, 1832-34.
- . “Mrs. Marcet”. *Biographical Sketches*. New York: Leypoldt & Holt, 1869.
- . *Harriet Martineau's Autobiography*. 2vols. Intro. Gaby Weiner. London: Virago, 1983.
- Sanders, Valerie. *Reason Over Passion*. London: Harvester, 1986.
- . “Harriet Martineau and Elizabeth Gaskell.” *Gaskell Society Journal* 16(2002): 64-75.
- Stevenson, William. “The Political Economist” *Blackwoods Magazine* XVII (1825): 208.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell*. London: Faber and Faber, 1994.
- Webb, R. K. *Harriet Martineau: A Radical Victorian*. London: Heinemann, 1960.
- 松村昌家「貧困 —— マンチェスターの<二つの国民>」松岡光治（編）『ギヤスケルの文学 —— ヴィクトリア朝社会を多面的に照射する』英宝社，2001。
- 直野裕子（訳）『ギヤスケル全集2 メアリ・パートン』大阪教育図書，2001。
- 吉野成美「似て非なるアダム・スミスの娘たち —— マルティノー著『経済学実例集』にみるマーセットの影響」『生駒経済論叢』3(2009): 225-246。

（愛知県立大学大学院国際文化研究科教授）

## Abstract

### Martineau and Gaskell —*A Manchester Strike and Mary Barton*—

**Mieko MATSUMOTO**

This paper deals with a comparative study of *A Manchester Strike* by Harriet Martineau and *Mary Barton* by Elizabeth Gaskell. Louis Cazamian analyses these two works and shows how they differ from each other in *The Social Novel in England 1830–1850*. He categorises *A Manchester Strike* as a utilitarian novel, while *Mary Barton* is categorized as a social novel. According to Cazamian, the former comes from the fusion of rationalism and imaginative literature, while the latter belongs to the long tradition of English art, embedded in the instructive and moral quality, like Charles Dickens' novels.

The difference seems to be caused by the different attitudes of Martineau and Gaskell towards the then new science, Political Economy. Gaskell's preface to *Mary Barton* declares that she tries to avoid political economy and political economists like Martineau. Martineau's major work, *Illustrations of Political Economy*, narrates the theory of political economy for working-class people, in order to make the theory and science easily understood. Therefore Martineau's and Gaskell's attitudes are contrary to political economy.

However, the social problems of the poor and the working people in Manchester are analysed from the similar viewpoints in *A Manchester Strike* and *Mary Barton*. First, both these works characterise labourers as sensitive and humane. Secondly, Martineau and Gaskell similarly try to solve the binary opposition of the employer and the employee. Thirdly, both of the works describe unions and strikes critically.

Above all, the young and Unitarian women novelists, Martineau and Gaskell, have similar interests in the social problems of the poor and the strike. They attempt to produce the common understanding of the middle-class and the working-class peoples. These novelists' interests in the poor and workers are maintained throughout their careers. Although the differences of the two novelists are emphasised, the paper also declares the common understanding of Martineau and Gaskell, which is fully connected with the history and the genesis of the social novel.

